# 私を追い出すのは いいですけど、この家の 薬作ったの全部私ですよ？❸

火野村志紀
Shiki Hinomura

Regina BUNKO

登場人物紹介
ティア
薬師を目指しているレイフェルの弟子。
ハルバート
アレックスの叔父で、彼の護衛をしている。
ジャーロ公爵
ミシェルの父親で、とても傲慢な性格の持ち主。近ごろ、不穏な動きを見せている。
アレックス
大国アスクラン王国の第三王子＆薬師で、凄腕薬師協会『蛇の集い』の支部長。通称、薬学王子。レイフェルの恋人。
サラ
『蛇の集い』に入った新人薬師でレイフェルの大ファン。薬のことになると、周りが見えなくなるほど没頭してしまう。
ミシェル
明るく無邪気なジャーロ公爵の娘。サラを本当の姉のように慕うほど仲良し。
レイフェル
元・カラスター男爵家の長女。辺境のヘルバ村で薬屋を始めてから、秘められた薬師の才能がどんどん開花する。ある日、怪しいお香の噂を耳にして——!?

# 目次

私を追い出すのはいいですけど、この家の薬作ったの全部私ですよ？ 3 7
そのほかの話　芽生えた想い 287
書き下ろし番外編
森のおくすり 327

私を追い出すのはいいですけど、
この家の薬作ったの全部私ですよ？3

## 始まりの話　みんなでキャンプ

季節は初夏。私とティアは、お店の窓から差し込む暖かな日差しを浴びながら、のんびりと過ごしていた。

「今日もいい天気だね～」

「そうですね～」

ああ、寝ちゃいそう。大きな欠伸が出たけど、お客さんはちょうどいない。

毎日暖かくて、ほーんといい季節だなぁ。なんといっても、この時季は薬草がよく育つ。摘んでも摘んでもまたすぐに生えてくるから、薬草は摘み放題っ！　他にも色んな種類の木の実やキノコが実るから、村の奥さんたちはよく採りに行っているんだよね。

あとで私たちも薬草を摘みに行こうっと。薬をたくさん作って、在庫を増やしておかなくちゃ。

……なんて計画を立てているときだった。



「レイフェルさんはおるかのぅっ⁉」

「ギャアアアッ‼」

お店のドアをバーンッと乱暴に開けて、猟銃を構えた村長が入ってきた。

私とティアは悲鳴を上げながら、咄嗟にモップを装備する。

「むっ？　そんなに慌てて、どうしたんじゃ」

きょとんと目を丸くする村長。

「どうしたはこっちの台詞ですよ！」

「強盗が来たのかと思ったじゃん！」

「すまんすまん。ちょっと気が立っておったんじゃ」

「何かあったんですか？」

いつも温厚な村長が珍しい。モップを置きながら尋ねると、村長はふんっと大きく鼻を鳴らして、宣言した。

「ワシはのぅ……猟師をやめることにしたぞぃ！」

「えーっ‼」

雨が降ろうが雪が降ろうが、なんだったら嵐の日も出かけるくらい狩猟が大好きなのに⁉

「ど、どうしてそんな急に⁉」
「そうだよ！　村長から狩猟を取ったら、何も残らないじゃん！」
　ティア、それはちょっと失礼だぞ！
「それがのぅ……。いつものように猪（いのしし）とウサギを仕留めたんで、家に持ち帰ったんじゃよ」
　ふむふむ。
「そうしたら、孫にウサギの耳を鷲掴みにしているところを見られて、大泣きされてしもうてのぅ。『おじいちゃんの人でなし』とか、『そんなんだから頭ハゲちゃったんだよ』とグサリとくることを色々言われたんじゃ。まったく、料理したもんは美味い美味いって食っとるくせに……」
　頭のことは、ただの悪口なのでは？　だけど、お孫さんの気持ちはちょっと分かる。ウサギ、可愛いもんね……
「しかも、家内にまで狩猟禁止令を出されてしまったんじゃよ」
「なんで？　奥さんは村長が何か狩ってくると喜んでるよね？」
　ティアが首をかしげる。
「ここ最近、毎日のように狩ってくるから食べ切れなくて困っとるんじゃと」



「それ、村長が悪いじゃん！」
　拗ねた口調の村長に、ティアが即座に指摘する。けれど村長も負けじと言い返す。
「ワシはただみんなに美味しい肉を食べさせたくて、狩猟をやってるだけじゃーいっ！」
　分かった分かった。だから猟銃振り回しながら騒がないで。
「……それで、ご家族と大喧嘩して家を飛び出してきちゃったんですね？」
「じゃって、家内が『あなたは、みんなにお肉を食べさせたいんじゃなくて、楽しいから狩猟をしているだけでしょ』って言うから……」
「奥さん、ド正論じゃないですか！」
　私がそうツッコむと、村長は気まずそうに視線を逸らした。図星かい。
「だけど、なんでうちの店に来たの？」
「もうこの銃はワシには必要ない。というわけで、レイフェルさん。プレゼントフォーユーじゃ。レイフェルさんなら、これを使いこなしてくれると信じとるぞぃ」
「なんでっ⁉　私、薬師なんですが？」
　猟銃を渡されそうになり、私は大きく仰け反った。
「まあ、獣以外を撃つときに、使ってもええんじゃぞ」
「「村長⁉」」

時々怖いことを言うな、この人。
「と、とにかく。私は薬師一本でやっていきますから、こんなの要りません！」
「そうかのぅ？　そんじゃ、ティアはどうじゃ？」
「村長のお古なんて、なんかヤダ！」
ティアは両腕で大きなバツマークを作って拒絶した。そりゃそうだ。すると村長は猟銃を抱えて、お店の隅に座り込んでしまった。
「なんじゃい、なんじゃい。みんなして、老人をバカにしおって……」
ぶつぶつと呟きつつ、たまにこちらをチラッと見てくる。
え？　このまま、うちに居座るの？　私とティアは顔を見合わせた。ティアは呆れたように溜め息をついて、口を開く。
「放っておいていいんじゃないですか？　そのうちお腹が空いたら帰りますよ」
放し飼いの猫じゃないんだから。それに、村長が猟師をやめるのは困る。非常に困る。
「ティア。村長が獣を狩ってこなくなったら、もうジビエ料理が食べられなくなるよ！　鹿肉のロースト、猪肉のステーキ、ウサギ肉の煮込み……」
「あああ……！」
耳元でぼそぼそとジビエ料理を呟くと、ティアがガタガタと震え出す。



「このままじゃ、あのご馳走がなくなっちゃうんだよ！　いいの⁉」
「よくないです！」
ティアは泣きそうな顔で首を横に振った。
「だったら村長には、死ぬまで猟師を続けてもらわないと！」
「ん～。お孫さんはともかく、奥さんはお肉が食べ切れなくて怒ってるんですよね。私たちが食べに行けば、解決じゃないですか？」
「どうかなぁ……」
奥さんが「猟師をやめろ」って言うくらいだから、相当余ってるんじゃないかな。流石の私たちも全部食べ切れないと思う。死ぬ。
「うーん。お肉を大量に使う方法かぁ……」
「……あっ、閃いた！」
ティアは掌をポンと叩くと、村長に近づいていった。
「ねぇ、村長。みんなでキャンプパーティーをしようよ」
「キャンプじゃと～？」
拗ねた様子で、ティアを見上げる村長。
「うん。それでお肉をたくさん使って、バーベキューをするの！　そしたら、あっとい

う間に食べ切れるんじゃない？」
「ほぉ～、バーベキューはええのぅ。野外で焼く肉は格別じゃぞぃ」
青い空。白い雲。
そして網の上で焼かれる、お肉たち。想像したら、お腹が空いてきたな……
「でしょ？　奥さんの悩みを解決して、村長は文句を言われなくなる。お孫さんも、美味しいお肉を食べたら、きっと機嫌を治してくれるって！」
「『おじいちゃん、イケメン！』って言ってくれるかのぅ⁉」
「アー、イウイウ」
コラ、ティア。適当に返事をするんじゃありません。
だけど村長はすっかりやる気になったようで、勢いよく立ち上がった。
「よーし、決めたぞぃ！　村の者たちで、キャンプパーティーじゃあ！　そうと決まれば、鹿をあと二頭くらい狩ってくるかの」
「「コラァ！　肉をこれ以上増やすな！」」
猟銃を構えて、店から出ていこうとする村長を通せんぼする。そのとき、ちょうど店のドアが開いた。
「こんにちは、おふたりと……えっ⁉」



入ってきたのはアルさんだった。村長が私たちに銃口を向けている状況を見て、目を丸くしている。
「やめろ、ジジィ！」
血相を変えたハルバートさんが店内に飛び込んで、村長から素早く猟銃を奪い取る。その隙に、アルさんが私たちを守るように前に立つ。
「おふたりとも、お怪我はありませんか⁉」
「あんた、こいつらの村長なんだろ⁉　なんでこんなことを……！」
ふたりとも村長がご乱心を起こしたと勘違いしてる。
ち、違うんですと私は慌てて事情を説明した。するとアルさんとハルバートさんは、はぁ……と深い溜め息をつく。
「なぁ、嬢ちゃん。こんなジィさんが村長で、この村大丈夫なのか？」
「その分、女性陣がしっかりしてますから……」
「まあまあ、ハルバート様。村長さんは……えっと……ご、ご立派な方ですよ」
アルさんが村長を雑に褒める。具体的な褒め言葉が思いつかなかったんだろうな……
「ふぉっふぉっふぉっ。アルさんはいい人じゃのぅ。そうじゃ。アルさんとでかマッチョも、キャンプに来んか？」

「キャンプですか？」
アルさんが目をぱちぱちさせて尋ねる。
「村長の狩ってきたお肉をたくさん食べるために、キャンプパーティーをするんです。ふたりも来てください！」
絶対に楽しいに決まってるもんね！　私は両手を握り締めて、力強い声で言った。
「なぁ、アル。ここは、お言葉に甘えることにしようぜ」
「……そうですね。それでは、よろしくお願いします」
アルさんはうれしそうに微笑みながら、ペコリと頭を下げた。
「やったー！　アルさんたちも一緒だー！」
「あ……でしたら、もうひとり誘っても、よろしいでしょうか？　最近、蛇の集いに入った新人がおりまして、ぜひ皆様に紹介したいのです」
何かを思い出したように、アルさんが村長に尋ねる。
「うむ。アルさんの知り合いなら、構わんぞぃ。……じゃが人数が多くなると、肉が足りなくなるかもしれんのぅ。ほれ、でかマッチョ。さっさと猟銃を返さんか」
村長はハルバートさんにそう言いながら、チョイチョイと人差し指を曲げて催促する。
まったく反省の色を見せていない……



困ったおじいちゃんだなぁと、私たち四人は肩をすくめた。
そしてその日のうちに、回覧板でキャンプのお知らせをしたところ、思ったよりたくさんの人が参加することになった。急な話だったけれど、こんな小さな村だと娯楽も少ないからね。とっても楽しみ。

二日後。
「ふぁぁぁ。ねっむ……」
大きな欠伸（あくび）をしながら、ベッドから起き上がった。昨日は気分が高揚しちゃって、なかなか寝つけなかったんだよね。早く朝ごはんを食べなきゃ……
「……ん？」
何やらいいにおいがして、お腹がぐぅ～と鳴った。そういえば、今朝はティアがごはんを作りに来てくれるんだっけ。においに誘われるように、ふらふらとキッチンへ向かう。
「おお。おはよう、嬢ちゃん」
ピンク色のエプロンを着けたマッチョが、フライパンで何かを焼いている。
あれ……ティア、ずいぶんとガタイがよくなったな。なんか別人みたいだ……と寝起

きの頭でぼんやり考えていると。
「お、おはようございます、レイフェル様」
リビングのテーブルを拭く私の恋人が、おずおずと朝の挨拶をしてきた。
「あ……おはようございます、アルさん。……ぎゃあぁぁぁっ!!」
瞬間、凄まじい悲鳴を上げながら、私は寝室に逃げ込んだ。
み、見られたっ！　髪はボサボサ、口の脇にはヨダレの跡がついている。寝起きのだらしない姿をアルさんに見られてしまったーっ！　というか、ここ私の家だよね？　なんであの人たちが朝ごはんの準備をしてるの!?
「レイフェル様、大丈夫ですかっ!?」
混乱していると、ドア越しにアルさんが心配そうに声をかけてきた。
「す、すみません、アルさん！　見苦しい姿をお見せしまして……」
「僕としては、図らずとも無防備なレイフェル様が見られて、すっごくうれし……い、いえ！　こちらこそ、無断で家の中に入ってしまい、大変失礼しました！」
ものすごい早口すぎて、アルさんが何を言っているのかよく分からなかった。だけど幻滅はされていない模様。
急いで身支度をしてドアを開けると、アルさんは廊下で膝を折り畳んで座っていた。



そして床に額をこすりつけんばかりに頭を深く下げる。
「本当に申し訳ありませんでした……っ！」
「そんな、謝らないでください！　おはようございます、アルさん！」
私がそう笑いかけると、アルさんは顔を跳ね上げて、ほっとしたように息をついた。
そんなわけで、アルさんと再びキッチンへ向かうと、ハルバートさんが二枚の皿に目玉焼きとベーコンを盛りつけていた。それが終わると今度はレタスをちぎり始める。サラダでも作るのかな。
「ア、アルさん……なんかハルバートさん、手際めっちゃよくありません？」
無駄のない動きに私が首をかしげていると、アルさんは衝撃の事実を語る。
「ハルバート様は、調理師免許を取得しておられます」
「えっ、マジですか!?」
化粧品の開発に携わっているのといい、女子力高っ！　私が驚愕していると、ハルバートさんはトマトを切りながら話す。
「アルは薬草採取で野営することが多いからな。そういうときでも、美味いもんを食わせてやりたいんだ」
お母さんじゃん……ホロリ。

「ところで、どうしてうちにいるんですか？」
「そ、それがですね……本日同行する新人が、ぜひレイフェル様の薬屋に行きたいということで、こちらへやってきたのです」
少し気まずそうに、指で頬を掻きながら説明するアルさん。
「けど嬢ちゃんはまだ寝てるし、弟子っこも店に来たばっかりだったんだ。そしたら『薬師さんのことは私に任せて、ハルバートさんは私たちの朝ごはんを作っててください』って頼まれたんだよ。そんで弟子っこが店の中を案内しに行ったぜ」
「なんですとっ⁉」
ティアってば、ハルバートさんが王妃様の弟だって忘れてるのでは⁉
「せっかくだから、もう一品作りてぇな」
ハルバートママはニンジンを手に取りながら、店のほうを指差した。ほ、本人もノリノリだから、まあいっか……よし、ちょっと様子を見に行ってみよう。
そっと店内の様子を窺う。
「わあっ、すごい！　化粧品もたくさん種類があるのですね……！　この薬は、どのような効果があるのですか？」
長い金髪を後ろで緩めに束ねて、几帳面に切り揃えられた前髪から、まん丸の眼鏡を



覗かせた真面目そうな女の子が見える。私やティアと同じくらいの歳かな。
「胃腸薬ですね～。効き目はもちろん、胃への負担があまりないようにしています」
「で、では、これはっ⁉」
眼鏡のテンプルをクイクイと動かしながら、薬の効能をティアに尋ねている。その熱心な姿に、アルさんが初めてうちの店に来たときを思い出す。あんなふうに薬を調べてたなぁ……
「ん？」
店内の隅っこには、もうひとり見知らぬ客がいた。茶髪の女の子だ。まだ十三、四歳くらいかな。不思議そうに瞬きを繰り返しながら、店の中をキョロキョロ見回している。
「あ、おはようございます、レイフェルさん！」
私に気づいたティアが挨拶をする。
「おはよう、ティア。えっと、こちらの方が……」
「初めまして、私はサラと申します。本日はアレックス様からのお誘いで、キャンプに参加いたします。よろしくお願いします」
私がチラリと視線を向けると、金髪の女の子は深々とお辞儀をした。そして顔を上げ少しずれた眼鏡をかけ直す。

「初めまして、サラさん。私は……」
「レイフェル様ですよね？　噂はお聞きしていますよ。なんでも薬神様の創造の加護を授かった、天才薬師だとか！」
サラさんがぐいぐい顔を近づけてくる。ひぃぃ、鼻息が荒い。
「ストップストーップ。レイフェルさんが怯えちゃってますから」
見兼ねたティアが、私からサラさんを引き剥がす。
「と、ところであの子も、蛇の集いの薬師さんですか……？」
ティアの後ろにササッと隠れながら尋ねると、サラさんはハッと目を大きく見開く。
「ミ、ミシェル様のことをすっかり忘れていました……。も、申し訳ありません、ミシェル様。つい薬のことに夢中になってしまいました……」
サラさんは慌ててその子へ駆け寄ると、深く頭を下げた。
「ううん、私もお店の中を見てて楽しかったよ！　初めて来たけど、薬屋さんってお薬以外もたくさん売っているんだね。化粧品とかお菓子も売ってるー！」
キラキラと目を輝かせるミシェルさん。薬屋にやってきて、こんなに感動しているお客さんは滅多にいない。めっちゃうれしいな……
「紹介します。こちらの方は、私の友人のミシェル様です。ジャーロ公爵家のご令嬢で、



以前私はミシェル様の家庭教師を務めていたのです」
「初めまして、薬師様。ミシェルです！　キャンプがしてみたくて、サラについてきました。今日はよろしくお願いします！」
サラさんの言葉に合わせて、ミシェルさんがペコリとお辞儀をした。
はきはきとした口調で話すミシェルさんは礼儀正しくて、いい子そうだ。
「こちらこそ、よろしくお願――」
ぐぎゅるるる……
私のお腹が、空気を読まずに大きく鳴った。
「あ、あの……ごめんなさい……」
「えっ。急にどうしたんですか、レイフェルさん。音なんて何も聞こえてないですよ」
「は、はい。私たち、何のことか分かりません」
私にめちゃめちゃ気を遣って、気づかない振りをするティアとミシェルさん。
「ふむふむ。レイフェル様もお腹が空くのですね……」
そんな中、サラさんは何やら感心した様子で呟くと、急いでノートとペンを取り出した。やめて……っ、私に追い打ちをかけないで……っ！
「嬢ちゃん、弟子っこ。朝飯できたぜー」

変な汗をかいていると、ハルバートさんが私たちを呼びにやってきた。
「やったー！　もう私、お腹ペコペコですよ！」
ティアがパタパタとリビングへ戻っていく。私も逃げるように、そのあとを追う。
「わりぃ。張り切って作りすぎちまったな」
テーブルには、既に料理が並べられていた。お、美味しそう～！
私とティアは向かい合って座り朝食を早速いただくことに。
本人の言う通り、朝食にしては少し量が多いかもしれないけど、どれも美味しくてペロッと平らげちゃった。
特に美味しかったのが、ニンジンのラペ。ふんわりしたニンジンの食感と、ドレッシングの爽やかな酸味が私のハートを鷲掴みにした。
「肉は昼間にたらふく食うからな。だから、今のうちに野菜をいっぱい食っとけ」
その心遣いもありがたい。
「ふえぇ、ハルバートママのごはんが毎日食べたいよぉ……」
「なんでパパじゃなくて、ママなんだよ！」
ハルバートさんは、ティアの呟きにすかさずツッコミを入れる。
「ブフォッ」



その様子を見てアルさんがコーヒーを噴き出す。……さ、さて、お腹も膨れたことだし、荷物を持って森へいざ出発！
「おーい、こっちじゃぞーぃ」
森の入口では、既に村長ファミリーが待機していた。
「おはようございます、村ちょ……ハッ！」
私はあるものに気がついて、息を呑んだ。
「ん？　どうしたんじゃ、レイフェルさん」
「なんでリュックじゃなくて、猟銃を背負ってるんですか？」
「ワシ、猟銃より重いもんは持てないんじゃよ～」
嘘つけ。狩った獲物をいつも自分で持ち帰ってくるのを知ってるんだぞ！
「ごめんなさいねぇ。この人、どうしても持っていくんだって聞かなくて」
村長の奥さんが頬に手を添えながら、ふぅと溜め息をつく。
「まあまあ。今日はあくまで、護身のために持ってきただけじゃから」
「本当ですか～？」
これまでの言動のせいで、つい疑いの目を向けてしまう。

「……まあ、ウサギを見たら反射的に構えてしまうかもしれんがのぅ。そのときは許してくれんか？」
そう言って、撃つジェスチャーをする村長。この人に好き勝手させたら、森から動物が消えそうだな。
「おじいちゃん……」
そんな祖父に対して、お孫さんが冷たい眼差しを向ける。
「ハッ。い、今のは冗談じゃよ」
「もう！　撃つなら、ウサギじゃなくて熊にしてよ！」
あ、熊ならいいんだ……
「おはようございます～」
「村長たち、もう来てたのか。早いなぁ」
キャンプに参加する他の村人も集まったので、みんなで青々と生い茂った森の中に入っていく。いつも薬草を摘みに来ているけれど、こうしてキャンプに来たのは初めてだ。今日は薬師であることを忘れて、のんびりまったり過ごそう。
「あ、レイフェル様！　あれ、コロネット草じゃないですか？」
サラさんが突然立ち止まって、私の肩を叩いてきた。



「へっ？　ど、どこですかっ⁉」
「ほら、あそこです！」
サラさんが少し離れたところを指差すと、一際目立った薬草が風に揺れていた。丸い形をした葉っぱが特徴的で、縁がギザギザしている。
あ、あれは……まさしくコロネット草っ！　普段なかなか見つけることのできないレア薬草じゃないですか！
「ゲーッツ！」
私は一目散に駆け寄って、コロネット草を摘み取る。
「教えてくださってありがとうございます、サラさーん！」
「いえいえ。レイフェル様のお役に立てて、何よりです」
いやぁ。すごいよ、サラさん。遠目で見て、すぐにコロネット草だと気づくなんて、知識が半端ないのでは？
「私、小さなころから薬草学を学んでいて、薬草を見分けることが得意なのです！」
サラさんは自分の目を指差しながら、少し自慢げに語った。勉強家だと感心していると、ティアがサラさんの肩を指でトントンと叩いた。
「サラさん、サラさん」

そう声をかけながら、後ろを指差す。
「ハァー……ハァー……」
そこには、汗だくになりながらフラフラと歩くミシェルさんの姿が。
「ミ、ミシェル様ーっ⁉」
「だ、だいじょぶ……グフッ」
全然大丈夫じゃなさそう。うーむ。まだ一時間くらいしか経ってないんだけど、ご令嬢に荷物を背負いながらの森歩きは過酷だったかな……
「あ、あわわ。薬草に夢中で、またミシェル様のことを忘れてしまいました……」
サラさんはしょんぼりと肩を落としている。ひとつの物事に夢中になると、周りが見えなくなるタイプかな？
「ちびっこ、荷物なら俺が持ってやるぜ？」
見兼ねたハルバートさんが、ミシェルさんへ手を差し伸べる。
「い、いえっ！　自分で持ちますっ！　息も苦しいし、足も痛くなってきたけど……なんだか、すっごく楽しいんです！」
額の汗をハンカチで拭いながら、晴れやかに笑うミシェルさん。サラさんはそんな姿を見て、人差し指をピンと立てながら念を押した。



「あまり無理はなさらないでくださいね、ミシェル様！」
「分かってる、分かってるー！　……ゲホゲホッ」
「もう……」
適当に返事をするミシェルさんに、サラさんは小さく溜め息をついたのだった。

さらに歩き続けること数十分。
ようやく私たちは本日のキャンプ地に到着した。近くには緩やかな川があって、釣りも楽しめるんだって。村長をはじめとする男性陣が早くも釣竿を用意している。
「テントを張るのが先でしょ！　釣りはそれからにしなさい！」
村長の奥さんが、彼らを一喝。怒られた釣りバカたちは、しょんぼりとしながらテントを張り始めた。今日は夕方になったら村に帰る予定だけど、せっかくだからテントを設営してみよう！　ということになったのだ。その中に入って、休憩もできるしね。
私とティアも、アルさんにレクチャーしてもらいながら作業を進めていく。
「このポールは、こっちに通してください」
「こ、こんな感じですか？」
「そうそう。上手ですよ、レイフェル様！」

テントを張り終えたら、最後に固定するためのペグを打ちつけて……設置完了！
「お邪魔しまーす！」
「あ、レイフェルさん。私もー！」
早速ティアとふたりでテントの中へ入る。思っていたより広いかも。私とティアが寝そべっても、まだスペースがある。
「雰囲気いいね～。あとでお菓子を食べながら、まったりしてよっか」
「いいですね～！」
「いえ、よくありません！　食べ物はテントから離した場所に置いてください。中に持ち込むなんて絶対ダメです」
ティアとふたりで盛り上がっていると、アルさんが指でバツのマークを作った。
「え？　なんでですか？」
「熊が食べ物のにおいにつられて、テントに襲いかかってくるからです！」
私とティアはヒィッ竦み上がった。森の熊さん怖い！
「安心せぃ、レイフェルさん。熊が出てきても、ワシが仕留めてやるからのぅ」
「村長もしかして、私たちを囮（おとり）にして熊を狩ろうとしてません⁉」
熊よりも、このおじいちゃんのほうが怖いな。



……さて、全てのテントを張り終えたので、料理の道具と材料を持って川辺へ向かう。
「女の子たちはバーベキューの準備に取りかかってちょうだい！」
気がつくと村長の奥さんがこの場を取り仕切っていた。
「のぅ、ワシら男衆は何をしたらええんじゃ？」
村長が自分を指差して尋ねる。
「あー……そうね。あんたたちは、釣りに行ってきていいわよ」
それは遠回しの戦力外通知だった。
「なんじゃい、ワシらだって料理の手伝いくらいできるぞぃ！」
「そうだ、そうだ！」
「男の料理を見せてやらぁ！」
抗議する男性陣。しかし、奥さんがひと睨（にら）みすると、全員押し黙ってしまった。
「あのねぇ……野菜の皮剥きもろくにできないくせに、何言ってるのよ。包丁の使い方だって危ないんだから、見てるこっちがハラハラするわ」
そんな中、ティアが一名の背中をぐいぐい押している。
「奥さーん。この人、調理師免許持ってるよ！」
「お、おい。やめろって」

口ではそう言いつつ、ハルバートさんはあまり嫌がってそうに見えない。奥さんが目を輝かせて、ハルバートさんの腕を掴んだ。

「あら、ホント⁉　それならあなたは、私たちのお手伝いね！」

「い、いやー。俺は釣りに行こうと思ってたんだが……おい。どうするよ、アル」

満更ではない様子でハルバートさんがチラリと横を見る。そこには、村人から借りた釣竿を装備したアルさんがいた。

「では僕は、村長さんたちと釣りに行ってきますね」

「えっ。アル、俺を置いていくの？」

「釣りをするのは初めてなので、ちょっと緊張しますね。それでは、行ってきます！」

「おい、コラ！」

アルさんがハルバートさんに背を向けて、男衆の群れへ駆けていく。

「ほら、ハルバートちゃんはこっちよ！」

そして奥さんに連行されるハルバートさん。

そ、そんなわけで、まずは材料を食べやすい大きさに切っていく。鹿肉、猪肉（いのししにく）、ウサギ肉とたくさんある。村長ったら、どれだけ狩ってきたんだか。おっと、お肉だけじゃなくて野菜もしっかり食べよう。ニンジン、玉ねぎ、ナス、キャベツ……



「キャーッ、目が！　目がいたーい！」

「ミシェル様、目を開けてください！　目を瞑ったまま包丁を握らないで！」

ミシェルさんは玉ねぎと死闘を繰り広げていた。サラさんがついてるから大丈夫だよ……ね？

なんとか材料を全部切り終わったら、いよいよ火の準備！

「よし、ここは俺に任しておけ」

ハルバートさんが辺りから小枝を集めてきて、網焼き器に手早く火を点ける。

「やるじゃない、ハルバートちゃん」

「ハルちゃんがいてくれて、助かったわ～」

「い、いやぁ。このぐらい、大（たい）したことじゃねぇよ」

奥さんたちにチヤホヤされて、ハルバートさんの口元が緩んじゃってる。そのとき、釣りバカたちが帰還した。

「ただいま帰りました！」

アルさんが満面の笑みを浮かべながら、手にしていたバケツを私に見せる。その中では、小魚たちがぐるぐると泳ぎ回っていた。一匹、二匹……十匹っ⁉

「アルさん、めちゃめちゃ大漁じゃないですか！」

「はい、大漁です！」
アルさんはうれしそうに報告する。その笑顔が可愛くて、思わず頭を撫で撫でしてしまう。
「こ、これがビギナーズラックというやつかのぅ……」
「それに比べて、俺たちは……うぅっ」
ニッコニコのアルさんとは対照的に村長たちの表情は暗かった。みんな、二、三匹しか釣れなかったんだって。中にはボウズで終わってしまった人も。ドンマイ……
アルさんたちが釣ってきた魚は、下処理をしてから串に刺して塩焼きに。
いよいよ、バーベキュー開始！
まずは、お肉をジャンジャン焼いていく。いい焼き色がついたら、果物で作った特製のソースをかけて……いただきます！
「お、おいひぃーっ！」
噛めば噛むほど溢れるお肉の旨みに、甘酸っぱいソースがよく合う。いや～、たまりませんなぁ！
サラさんとミシェルさんをチラリと見ると、ふたりとも幸せそうにお肉を頬張っていた。



「えへへっ。私、こんなに美味しくて楽しいごはんは初めてです。みんなで一緒に食べるっていいですね！」
串焼き片手に、ミシェルさんがうれしそうに言う。
「……ご両親とは食べないの？」
「んーん。ないです」
村長の奥さんが尋ねると、ミシェルさんは首をフルフルと横に振った。
「だから……今日はキャンプに来て、本当によかったです！」
そう言って微笑むミシェルさんの横顔を、サラさんは静かに見つめていた。
空が鮮やかな赤紫色に染まり始めたころ、サラさんとミシェルさんは一足先に帰ることになった。
「えー！　もう帰っちゃうんですか？」
ティアが残念そうな口調で尋ねる。
「ごめんなさい、ティアさん。でも、あんまり遅くならないようにって、屋敷のみんなに言われてるから……」
ミシェルさんは俯きながら、深い溜め息をついた。唇を尖らせながら、つま先で地

面を蹴っている。本当はまだ、帰りたくないんだろうなぁ。
「えっと……皆さん、今日は本当にありがとうございました。……また遊びに来てもいいですか？」
「もちろんじゃ。楽しみに待っとるぞぃ」
ミシェルさんが顔を上げておずおずと尋ねると、村長は大きく頷(うなず)いた。その答えを聞いて、ミシェルさんとサラさんはうれしそうに笑い合う。
「それでは、そろそろ失礼しますね」
サラさんが最後に挨拶(あいさつ)して立ち去る。
「あっ、ちょっと待った！」
ティアがふたりを呼び止める。そしてリュックから何やら紙袋を取り出すと、それをサラさんに差し出した。
「これ、私が作ったマフィンです。よかったら、食べてください！」
「えっ、いいんですか？」
サラさんは紙袋を受け取ると、うれしそうに顔を輝かせた。
「こんなにたくさん……ありがとうございます。あとでミシェル様といただきますね！」
「ふっふっふ。ティアの作るマフィンはどれも美味しいけど、私のイチオシはオレンジ



味です。刻んだオレンジピールが入ってるから、ちょっとほろ苦くて、とっても美味しいんですよ！」
私は後ろからティアの両肩に手を置き、誇らしげにそう語る。すると、サラさんは私たちをまじまじと見て小さく笑う。
「ふふっ。レイフェル様とティア様って、なんだか姉妹みたいですね」
「ありがとうございます。よく言われるんですよ」
まあ私の実の妹は、今ごろ炭鉱で汗水を垂らしながら働いていると思いますが……
「だけどサラさんとミシェルさんも、頑張り屋の妹と、それを見守るしっかり者のお姉さんって感じがしますよねー」
ティアの言葉に、私はふたりを見比べながらコクコクと頷(うなず)いた。髪も瞳の色も違うのに、ふたりが一緒にいるところを見ていると、違和感がないっていうか、雰囲気が似てるっていうか。
「ほんとですか？　使用人のみんなにも、よく言われるんです。ね、サラ！」
「あ、はい。でも……なんか恐れ多くて……」
両手を合わせてうれしそうに話すミシェルさんに、サラさんは頬(ほほ)を掻きながら笑っている。うん、この感じが姉妹っぽい。

「では今度こそ、失礼いたします」
サラさんとミシェルさんは森の出口に向かって歩き始める。
「皆さん、さよーならー！」
何度も振り返って手を振るミシェルさんとサラさんに、私たちも大きく振り返したのだった。



## 第二話　ジャーロ公爵家

屋敷に着いたころには辺りは真っ暗になっていて、空には星が輝いていた。
サラが玄関の扉を叩くと、メイドたちがいそいそと出てきてお辞儀をした。そしてサラの隣にいるミシェルを見て、ほっと安堵の息をつく。
「ミシェル様！　日が暮れる前には帰ってくるとおっしゃっていたではありませんか！もう夜ですよ！」
メイド長が目を吊り上げて咎めると、ミシェルはびくっと肩を跳ね上げた。そんな彼女に代わりサラが頭を下げる。
「帰りが遅くなってしまい申し訳ありませんでした」
「サラ様……」
「サ、サラを怒らないで！　サラはもっと早い時間に帰ろうって言ってたのに、私がまだ帰りたくないって我儘言ったせいで遅くなっちゃったの！」
必死な様子でサラを庇おうとするミシェルを見て、メイド長はわずかに表情を緩めた。

「仕方ありませんね……。サラ様に免じて、今回だけは大目に見てあげます」
「ほんと？　ありがとう！」
ミシェルがぱぁっと表情を明るくさせると、メイド長の目が鋭い光を放つ。
「今回、だ、け、ですからね！」
「は、はーい！」
ミシェルは逃げるように屋敷の中へ駆け込む。と思ったら、すぐに戻ってきてサラに声をかける。
「今日のキャンプ、すっごく楽しかったね！　また行こうね！」
「はい、私も楽しかったです。またお誘いしますね、ミシェル様。今日はゆっくり休んでください」
ミシェルは頷（うなず）くと上機嫌に鼻歌を歌いながら、自分の部屋へ向かう。広間を通りかかると、小太りの男がソファーにもたれながら、数枚の書類を読んでいた。
「お父様、ただいま帰りました！」
ミシェルは男へ駆け寄って、声を弾ませながら報告する。
「ん？　ああ……ミシェルか」
男はミシェルを一瞥（いちべつ）すると、すぐに書類に視線を戻してしまう。素っ気ない反応に、



ミシェルは少し迷ってから再び話しかけた。
「あの、今日はサラ様と一緒にキャンプに行ってきました！　森の中をたくさん歩いたり、みんなで作ったごはんを食べたりして……」
「そんなくだらん話を聞かせようとするな。仕事中なのが見て分からんのか？」
冷ややかな声が娘の言葉を遮る。
「……ごめんなさい、お父様」
ミシェルが一言謝ってその場から立ち去ろうとすると、ひとりのメイドが広間に入ってきた。
「ご主人様、商人の方がお見えになりました。応接間でお待ちいただいております」
「分かった。すぐに向かおう」
男は返事をすると、ソファーから立ち上がった。その際、ミシェルを見て訝（いぶか）しげに眉を顰（ひそ）める。
「なんだ、まだいたのか」
ミシェルは一瞬目を見開くと、無言で頭を下げて広間をあとにした。
とぼとぼと、ひとりで長い廊下を歩いていたが、ある部屋の前でふと足を止める。ドアをノックしようとすると、通りかかったメイドに話しかけられた。

「ミシェル様。奥様はただいま外出されております」
「何時ごろに帰ってくる？」
「申し訳ございません。何も伺っておらず私には分かりかねます」
「そっか。教えてくれてありがと」
表情を曇らせるメイドに、ミシェルは笑顔で返した。お母様はまた若い男の元へ出かけてしまったのだろう。
……こんなの、いつものことだよね。自分にそう言い聞かせながら部屋に戻り、閉め切っていたカーテンを開ける。
「あ」
窓の外には、大好きなサラがいた。屋敷をじっと見上げるサラに、バイバイと小さく手を振る。すると向こうもこちらに気づいて、優しく微笑みながら手を振り返した。
たったそれだけのことだけれど、ミシェルの冷たくなっていた心はほんのりと温かくなった。



## 第三話　不思議なお香

みんなでキャンプをしてから一週間後。
今日はお店の定休日で、私とティアは港町を訪れていた。美味しいものをたくさん食べて、お買い物をしようと思います！
「レイフェルさん、まずはお昼食べに行きませんか⁉　最近オープンしたリゾット屋がすんごい美味しいって評判みたいなんですよ」
ティアがお腹をグーグー鳴らしながら、興奮気味に提案する。朝ごはんを抜いてきたらしく、めちゃめちゃ飢えているご様子。食べすぎて胃を痛めないように気をつけてね……
ちょうどお昼の時間だし、まずはそのリゾット屋さんに行ってみることに。
ずらりと屋台が立ち並ぶ通りは大勢の人で賑わっていて、美味しそうなにおいがあちらこちらから漂ってくる。
ぐっ……まずい。においに引き寄せられてしまいそう。ティアがリゾット屋に行きた

いって言ってるのに、私ったら……

誘惑を断ち切るように首を横に振っていると、ティアが急に立ち止まる。

「レイフェルさん、ちょっと相談なんですけど……やっぱお昼、屋台で何か買いませんん？」

真剣な顔で網焼きの屋台を指差す。網の上では、お肉がじゅうじゅうと音を立てて焼かれている。

「ちょっ、ティア？　リ、リゾットはどうすんの？」

「だって、ほら……お米より、お肉を食べてお腹いっぱいになりたいじゃないですか」

……ティアがそう言うのなら仕方ないよね、うん！　私たちは軽やかな足取りで、網焼きの屋台に向かおうとしたときだった。

「何言ってやがんだ、クソババァ！」

突如響き渡る男性の怒声。何事⁉　と周りをキョロキョロと見回すと、前方に人だかりができている。何かあったのかな。ティアと目配せし合って、様子を見に行く。

「いいから、とっとと料金を払いな、この若造が！」

「んだとぉ⁉」

紫色のとんがり帽子を被ったおばあさんが、太っちょのお兄さんと何やら言い争いを



していた。おばあさんの前には小さなテーブルがあって、透明な水晶玉と『占いやってます』の立て札が載ってる。うっ、怪しさ満点……！

「占い師っていうより、邪悪な魔女……モガッ」

私は慌てて弟子の口を手で塞いだ。おばあさんに聞かれたら、呪い殺されるかもしれない。

「大体、俺はただ店の前を通りかかっただけで、占ってくれなんて一言も言ってねぇだろ！　なのに勝手に占っといて、料金よこせって意味分かんねぇ！」

太っちょお兄さんが、おばあさんをビシッと指差して抗議する。

あれ？　占いの結果が気に入らないから払わねぇってことじゃなくて？　これはおばあさんが悪いのではと、お兄さんに同情の眼差しが集まる中、おばあさんも負けじと反論する。

「そんなこと言ったって、あんたの運勢が見えちまったんだから仕方ないだろ！」

そんな無茶苦茶な！

「うるせぇ、ボケババァ！」

あ、ほら。太っちょお兄さんをますます怒らせちゃった。

「あんだってぇ⁉　もっかい言ってみな、デブ！」

おばあさんもおばあさんで、水晶玉をお兄さんへ投げつけようとする。
「やめろ、ばあさん！　しゃーないから、兄ちゃんも払ってやれよ。たったの十イェーンだろ？」
暴力沙汰に発展しそうになり、流石（さすが）に隣の屋台の店主が仲裁に入った。十イェーンって、クッキー一枚くらいの値段じゃん！
「けっ、こんな胡散くせぇババァに金なんて払うかよ！」
太っちょお兄さんはテーブルの脚をガツンッと蹴ると、捨て台詞を残して歩き出す。
「あっ、待ちな若造！　いいかい、とにかく落とし物には注意するんだよ！」
おばあさんがそう忠告しても振り向きもせず、無視してどこかへ行ってしまった。……な、なんかすごいものを見ちゃったな。
「レイフェルさん。あのおばあさんに絡まれる前に、私たちも早く行きましょう」
「うん！」
ティアが私の耳元で囁くので、私はコクンと頷（うなず）いた。変な人には関わっちゃいけません。しかし、そのとき。
「ん？　そのおさげ娘、ちょいと待った！」
おばあさんが私を見ながら手招きしてる。次のターゲットは私かい！



「は、走って逃げるよ、ティア！」
「はい！」
「あっ、こら！　逃げんじゃないよ！」
おばあさんが後ろでなんか叫んでいるのが聞こえるけれど、構わず猛ダッシュ。通りから離れたところで立ち止まった。
「ハァ、ハァ……ここまで来れば、大丈夫だよね……？」
胸に手を当てると、心臓がバクバク言ってる。あの通りにはもう戻れないし、網焼きは諦めるしかない。トホホ……
「あれ？　あの男の人、さっきの占いおばあさんにカモられそうになってた人じゃないですか？」
私ががっくり肩を落としていると、ティアが前方を指差した。
あ、ほんとだ。さっきの太っちょお兄さんが何かを確かめるように、キョロキョロと地面を見回している。
ははーん。さては、おばあさんが言っていたことを気にしてるな？　だったら、お金を払ってあげればよかったのに。すんごい安いんだし。
「野郎ども！　もう少しで休憩だから、それまで気ィ抜くんじゃねぇぞ！」

「「押忍ッ!!」」

突如青空に響き渡る、気合いの入った野太い返事。大工たちが新しい家を建てているところだった。

二階建ての一軒家かな。あんなに高くて足場も悪いのによくのぼれるよなぁ。やっぱり大工さんってすごいと仕事ぶりに感心していると、太っちょお兄さんがこちらに向かって、とぼとぼと歩いてくる。そして、お兄さんがその家の前を通りかかったとき、事件が起きた。

「あ、やべっ！」

声がしたほうを見ると、木材が急降下している。その真下には太っちょお兄さん。しかも本人は全然気づいてない。ダメだ、声をかけても多分間に合わない！

「レイフェルさん!?」

突然走り出した私に、ティアがぎょっとする。

「どすこーいッッ!!」

私は太っちょお兄さんに思い切りタックルをした。

「うぉぉぉっ!?」

突然の奇襲を受けたお兄さんは、大きく吹っ飛んで地面に倒れ込む。私はクッション



のようなお兄さんのマシュマロボディに倒れてなんとか助かった。そして背後では、バキャッと嫌な音がする。

恐る恐る振り返ると、石畳に落下して割れた木材があった。その周りには木のクズが散らばっている。

「「ヒィィィッ！」」

あんなもん、頭に直撃していたらどうなっていたことか。私と太っちょお兄さんは、恐怖でガタガタと震えた。

「バカヤロー！　何やってんだ、お前ぇ！」

「す、すいやせんでしたぁっ！」

「まったく……おう、あんたたち、大丈夫か!?」

大工を叱りつけたあと、親方が足場から下りて私たちに声をかける。な、なんとか無事です。太っちょお兄さんも、私にペコッと頭を下げて歩き出した。

「す、すごい……本当に当たった……あの変なおばあさん、きっと本物の占い師ですよ」

ティアがぼそりと呟く。

「どうしたの、ティア？」

「あのおばあさん、本物の占い師ですよ！」
「え……ど、どゆこと？」
「だってほら！　さっきの太っちょに、落とし物に注意って言ってましたよね！」
そ、そういえば！　私たちが思っていたのと意味合いは違うけど、適当に言ってたわけじゃなかったんだ……！
「おばあさんのところに戻ってみましょうよ！　レイフェルさんに何か言おうとしてたじゃないですか！」
「え～⁉　怖いからやだよ！」
あんた死ぬよ、とかズバリ言われちゃったらどうすんの⁉　イヤイヤと首を横に振るけれど、結局ティアに引きずられて屋台通りに戻ってきちゃった。
「あれー？」
あのおばあさんがいた場所には何もなくなっていた。帰っちゃったのかな。近くの屋台の人に聞いてみる。
「あのー、ここにいた占い屋さんって……」
「え？　あっ、あのばあさん、どこに行ったんだ？　さっきまでは確かにここにいたはずだけど」



屋台の店主は目をぱちくりさせながら、首をかしげた。
「ん～、変なばあさんだなぁ。フラッとやってきて店を構えたと思ったら、いつの間にかいなくなっちまうなんてよ」
「そうだったんですか……」
「もしかしたら、魔物の類いだったのかもな！　ガハハ！」
否定はできないなぁ……
「レイフェルさんに何を言おうとしてたんですかね」
ティアが顎に指を当てながら、うーんと唸り声を上げる。
おばあさんがいなくて正直ほっとしたけれど、私もなんだかモヤモヤするなぁ。不吉な予言とかじゃなければいいんだけどさ。まあ、いつまでも考えてたって仕方ないよね。
さーて、ごはんごはん。運動しすぎて、もうお腹ペッコペコだよ。
私とティアは真っ先に網焼きの屋台に並んだ。そして焼きたてのお肉をゲット！
「まだ若いからって、肉ばっか食べちゃダメだよ。野菜も食べな！」
網焼きの店主はそう言って、野菜もいっぱいサービスしてくれた。なんかお肉より多いような……食べ切れるかなぁ。
早速空いているベンチに座って、いただきます。ふたりで黙々と食べていると、見覚

立ち読みサンプルはここまで